

# 自 画 自 賛

—古代ペルシアの場合—

伊 藤 義 教

## Notes on Old Persian *tačara-* and *handiš-* (not *hadiš-*).

Notes on Old Persian : *tačara-* “structure detached”(from main building), i. e. *tača-* (pres. stem of *tak-*)+-*ra-*, nomen agentis meaning “running (out), flowing (out), derived, detached, separate”; and *handiš-* (< \**hām-d[ā]-iš-*, *dā-* “to put” or *dā-* “to bind”—cf. Ind. *sam-dhā-*, and *sam-dā-* “to bind together, to tie”, *sam-dh-i-*) “(Palace of) Aggregation (of many materials)” (cf. Darius Susa f., ll. 22-58), neither *hadiš-* “abode” < *had-* “to sit” nor Ind. *sādhiš-* “God of place”.

自画自賛といえは、いまでは、自分で自分のことをほめる、ハナモチならぬことのように多くとられているが、本来はそうではなく、自分で画をかいて自分で賛をすることである。自分で画をかき賛をするのだから、もちろん、当人には、画も賛の文句もわかっている。ところが、他人が見てもわかってくれるかとなると、そう簡単にはいかない。賛の字体がひどく草行化されていると、いまの若い人たちには読んでもらえない。そういうときに、「若いものはつまらん」などと、おこってはならぬ。画は見るが賛はよまない、という鑑賞のしかたが、ほかにもずいぶんあるからである。ことに、オリエントの美術や工芸などに接するとき、似たようなことがしばしば見うけられる。なにしろ、オリエントは文字の世界である。ちょっとしたものにも、よく、文字でなにかが書きつけられている。そういうときに、なにが書きつけられているかを見ずに、いきなり、美術論をたたかわすのだが、あえて賛といわなくても、そうした銘文を理解することによって、論や鑑賞にも幅が出たり深みが増したりするのではないか。そこには歴史がひめられ、信仰が光り、文学がかおっているかもしれないのである。磨崖や王宮建築などこのころハカーマニシュ王朝の遺産のかずかずに接して、筆者は、その方面に門外漢では

## 自 画 自 賛

ありながら、いつもこの思いを新たにす。センサク好きというのであろうか、そこに残されている賛(?)が気になるのである。

ここではその例として *tačara-* と *hadiš-* をとりあげてみよう。どちらも “palace” ぐらいの意味で、シノニムみたいなものとされている。同一の建物にこの両者が用いられているのだから、そう思われてもしかたがないかもしれない。たとえば、スーサのダーラヤワウシュ大王の王宮をみると、いわゆる Darius Susa 碑文 d では、

余はダーラヤワウシュ、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、この世界の王、ウィシュタースパの子、ハカーマニシュの裔。王ダーラヤワウシュは告げる：アウラマズダーの御意によって余はこのダチャラを造営した。

といって、王宮をダチャラ *dačara-* とよんでいる。*dačara-* は *tačara-* の異形。ところが、同じ王宮の造営碑文、いわゆる Darius Susa 碑文 f では、同一の王宮が *hadiš-* とよばれている。この碑文 f は、この論考で重要な役割りを演じるので、その 1. 22 から終わり (1.58) までを、つぎに訳載しよう。

余(ダーラヤワウシュ I 世)がスーサに造営したこの *hadiš*——その材料は遠方から運ばれた。大地は、余が岩盤に達するまで、掘りさげられた。壕が出来てから、ある部分では高さ40肘(cubit)、他の部分では高さ20肘に、碎石が投入された。その碎石の上に *hadiš* を余は建てたのである。

そして、大地が掘りさげられたこと、また碎石が投入されたこと、また日乾し煉瓦がつくられたこと——それはバビロニア人が行なった。

サイプラス樹——それは、レバノンという山(があり)、そこから運ばれた。アッシリア人——かれらがそれをバビロンまで運び、バビロンからカリア人とイオニア人がスーサまで運んだ。ヤカー材はガンダーラから運ばれたが、またカルマニアからも。

金はサルディスとバクトリアから運ばれ、ここで加工された。瑠璃とシンカブル石<sup>1)</sup>はここで加工されたが、それはソグドから運ばれた。トルコ石——それはコーラスミアから運ばれ、ここで加工された。

銀と黒檀はエジプトから運ばれた。城壁がよってもって築かれた材料——それはイオニアから運ばれた。象牙はここで加工されたが、エチオピアからと、インドから、ならびにアラコシアから運ばれた。

石柱はここで加工されたが、エラムにあるアビラドゥという村——そこから運ばれた。

その石を加工した加工者たち——かれらはイオニア人とサルディス人。金を加工した金工者たち——かれらはメディア人とエジプト人。木材を加工した者たち——かれらはサルディス人とエジプト人。煉瓦をつくった者たち——かれらはバビロニア人。城壁に彩色した者たち——かれらはメディア人とエジプト人。

王ダーラヤワウシュは告げる：スーサにきわめて壮麗なものが（余によって）命じられ、きわめて壮麗なものが（余によって）出来<sup>しめつた</sup>した。アウラマズダーが余を守護し給うように、そして余の父ウィシュタースパと余の王土をも。

とあり、同じ大王のスーサ碑文 j にも (II. 4-6),

王ダーラヤワウシュは告げる：アウラマズダーの御意によって、余により造営されたこの *hadiš-* を見んすべてのものに、（それが）壮麗なものに見えんことを。

とある。*tačara-* も “palace”, *hadiš-* も “palace” というのでは、能がなさすぎる。ここで、センサクの虫がそろそろ頭をもたげてくる。いろいろしらべてみたら、*tačara-* の語源は *tak-* で、*tak-* というのは走るとか（水）が流れるという意味。ここまでは大体意見が一致しているが、それからさきがいけない。いろいろな説が、つぎつぎに、打ち出された。曰わく、*tačara-* とは「競馬場」であるとか、「連らなつた室をもつ建物」だとか、果ては「円い妒のある場所」だとか。しかし、語形論はもっと丹念にやってほしい。*tača-* は *tak-* の現在幹、それに *-ra-* を接尾したものが *tačara-* だから、*tačara-* は現在分詞的な機能をもつ行為者名詞ということになり、意味は「走（り出）るもの、流れ（出）るもの、派出しているもの、分離しているもの」だから、この語が建物に関して用いられるときは、その建物がこういう動作を主体的に行なうのでなければ意味がない。そうすると、その建物は、なにか *main building* があって、それから岐かれ出ているもの、または *main building* に対して別館、分館、離れのごときもの、そういうものでなければならない。単なる *palace* ではない。そこで、こういう意味を、上に引いた *Darius Susa* 碑文 d にあてはめると、この建物は、なにか中心をなす建物を本館とみて、その支邸であるということになる。

では、その本館とみるべきものはなにか。それは、ダーラヤワウシュ I 世のアパダーナである。現在の廃址はそのようなものを確認させないが、それがかつて存していたことはアルタクシャサ II 世のスーサ碑文 a (*Artaxšassa II Susa a*) によって明らか。その II. 3-5 にはつぎのように記している：

このアパダーナは余の高祖ダーラヤワウシュが造営したが、のち、余の祖父アルタクシャサ (I 世) のとき、焼失した。アウラマズダー、アナーヒターおよびミスラ

## 自 画 自 賛

の御意によって、このアパダーナを余は造営した。

メーン・ビルディングに対するタチャラの立場は、ペルセポリスにもあてはまる。ここでは、基壇上に2個、基壇外に1個のタチャラがある。基壇上の2個というのは、ダーラヤワウシュのペレスと呼ばれているものと、クシャヤールシャーのハディシュとよばれているもの。前者はダーラヤワウシュのペルセポリス碑文 a (Darius Persepolis a) に、こう記しているのによって明らか：

このタチャラを造営したダーラヤワウシュ、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、ウイシュタースパの子、ハカーマニシュの裔。

この碑文は、この王宮の柱廊からメーン・ホールへ通じる用門の東西両側柱 (jamb, doropost) に造刻されている。後者は、クシャヤールシャーのハディシュそのもののなかで見つかったものではないが、この王宮のものと確認されているトルス (torus—柱脚の半円形<sup>うりがた</sup>制形) に造刻されている碑文によって明らかとなった。このトルスは、ハレムと通称されている建物の両翼の最西端の数室に倒壊していたもので、数も多い。いわゆるクシャヤールシャーのペルセポリス碑文 j (Xerxes Persepolis j) とよばれるものがそれで、古代ペルシア語版には

余はクシャヤールシャー、偉大な王、諸王の王、諸邦の王、この世界の王、王ダーラヤワウシュの子、ハカーマニシュの裔。王クシャヤールシャーは告げる：このタチャラを余は造営した。

とある。この碑文のアッカド語版には「このタチャラを」というところが、「この家、タチャラを」とあって、タチャラがなにか術語的なニュアンスを有していることを思わせる。はじめのダーラヤワウシュのタチャラというのは、中央宮——E. Herzfeld は Tripylon「三門宮」とよんでいるが、E. F. Schmidt は Council Hallとよぶ。この王宮は最初期にはアパダーナや王座・謁見の間などの機能を果たしていたと、筆者伊藤は考えている——か、アパダーナ——完成したのはクシャヤールシャーのときであるが、起工はダーラヤワウシュのとき——に対してであり、クシャヤールシャーのタチャラというのは、父王の建てた中央宮か、父王によって起工されみずからの手で完成させたアパダーナか、あるいはこのふたつを併せたものかに対してである。そういう main building に対し、それから派生した建物、detached building というので、タチャラとよばれるのである。最後に、もうひとつ、ペルセポリスの基壇外というのは、基壇の南方 500 m に同じくクシャヤールシャーのタチャラ (12柱を有する) が 1951 年に発見されたものを指す。これも基壇を中心とみれば、まさしく「離れ」であるからタチャラである。近世ペルシア語 *tazar* (<tačara-)

は summer house だが、常時起臥する本邸からはなれて夏場だけの使用とみれば、なにも不思議はない。tačara- を筆者のように解釈してこそ、この点が理解できる——少々自画自賛めいてきた。はなしを、もうひとつの語詞 *hadiš-* に移そう。

これまで述べたことから明らかになったことは、(1)スーサのダーラヤワウシュ王宮はアパダーナに対してはタチャラであるが、また *hadiš* とよばれていること、(2)ペルセポリスのクシャヤールシャーの王宮は父王の王宮かアパダーナに対してはタチャラであること、などであるが、そのクシャヤールシャーはみずからこの王宮を *hadiš* とよんでいる。そのことは Xerxes Persepolis 碑文 d によって明らかで、その II.15-17 には

偉大な王クシャヤールシャーは告げる：アウラマズダーの御意によって、この *hadiš-* を余は造営した。

とある。そうすると、*hadiš-* はどういう意味かと問うてみたくなる。tačara- も *hadiš-* も palace ぐらいの意味で、シノニムのように見られてきたが、tačara- が詳細な概念規定をうけると、*hadiš-* もこれまでのまま居座わることがむずかしくなってくる。例によって、まず *hadiš-* をしらべてみると、W. Brandenstein und M. Mayrhofer: *Handbuch des Altperischen*, Wiesbaden 1964, p. 122, *hadiš-* n. の項には次のように解説されている：

Palast, Residenz, Pfalz, eig. 'Sitz der Macht, Stuhl'. [=aw. *Hadiš-* Gottheit des Wohnsitzes, vgl. ai. *sádas-* n. Sitz, Thron, zu *had-*. Eine genau german. Entsprechung der iran. Bildung ist *Φρυγερσις* 'Phrygersitz' bei Ptolemaios nach Kretschmer, Glotta 30 (1943) 137, Miscell. Acad. Berolin. II/1 (1950) 174.]

ところが、この解釈には部分的にひっかかるものがある。それについて F. B. J. Kuiper (*Indo-Iranian Journal* Vol. VIII [1965], p. 299) は

……Mayrhofer accepts Kretschmer's idea of connecting it (i. e. *hadiš-*) with the place name *Φρυγερσις* in Ptolemy on the assumption that this is Germanic and means "Phrygersitz". This theory presupposes, accordingly, a PIE. word *\*sodis-*, n., not represented in any other language. Kretschmer was certainly justified in ignoring Bartholomae's attempt to connect with Younger Avestan equivalent *hadiš-*, name of the deity of the place of abode, with Skt. *sádas-* n. (BB, 17, 1891, p. 113), but he also disregarded

the fact that as early as 1881 the Avestan word had been connected with Ved. *sádhiṣ-*“place” (Ludwig, *Der Rigveda*, IV, p. 384).

と批評している。これは、Av, *hadiš-*「産土神の名」は Ved. *sádhiṣ-*「場所」と結びつくもので、Skt. *sádas-* n.「坐席, 住居」と結びつけようとするバルトロメー説やそれを支持する立場は賛しがたく、O. P. *hadiš-* “seat, residence” は *had-*: Ind *sad* “to sit” と結びつくにしても、PIE. *\*sodis-* を措定するほど古いものではない、というふうにも要約できるかと思われる。そうすると、O. P. *hadiš-* は依然として「王宮」ほどの意味におちつくことになる。この *hadiš-* については、もうすこし語形論を展開してみる余地もある。Ind. *sádas-* n. や *ēōs* からみて、イラン語形としては、まず *\*hadah-* n. が考えられる。単数主格—対格では *\*hada* となる——これは *hadā* “together with” とまぎらわしい。これをさけるために、末音 *-ah* (<*-as*) を廃して *-iṣ* に代え、*hadiš-* をつくる。こうすればアイマイさがなくなる。O. P. では語末子音 *-š* は、*-i* と *-u* の後では残留するが、その他の場合では脱落する。そういうところから、似たような取り扱いをみせるケースがほかにもある。例えば *āp-*「水」がそれ。アヴェスターでは単数主格は *āfš-*——しかし、これだと、古代ペルシア語では *š* も落ち、つづいて *f* もおちて、単なる *\*ā* になってしまう。これではとても「水」は汲みとれまい。そこで、古代ペルシア語は *āp-* を *-i* 幹曲用に変えて単数主格を *āpiš* とした。こうすれば *-š* も保持されるわけ。だから、*\*hadah-* を *hadiš-* に変形したと考える——これがひとつの考え方。それから、インド・イラン語のみでなく、印欧語一般としてみても、中性名詞で *-as* に終わる形は *-is* (*-iṣ*, *-iṣ*) に終わる形を併わせ有する場合がある。例えば *rócas-* n, “light”: *rocis-* n. “ditto”; *κρέας* “flesh”: *kravis-* n, “raw flesh”; *támas-* n, “darkness”: *támis-ra-* n, “ditto”; *ávas-* n. “favour”: *aviṣ-* (合成詞にみえる形: *aviṣyát-* adj. “helping”) など。したがって *sádas-*: *\*hadah-* に *hadiš-* が並存してもよいというわけ。こういう語形論を筆者は、いちおう、展開してみた。しかし、どうもひっかかるものがある。

*hadiš-* が *had-* “to sit” から派生したとすれば、「すわること; すわる場所」というのが本来の意味。もっとも、Mayrhofer によれば「権勢の座, 椅子」であるが、どちらから出発しても、「王宮」の意味に帰着するとされている。しかし、筆者からすると、やはり、原意がもっとも重要であり、かの当代人にはその原意がじかにアピールしていたと思われる。「王宮」というような意味にまで突っばしるのは後代人。そういう筆者によると、*hadiš-* を理解するうえに、ふたつの重要なキメテがある。ひとつはペル

セポリスのダーラヤワウシュ大王の王宮タチャラ、もうひとつは p. 80f. に訳出した同王のスーサ碑文 f。まず、前者についてであるが、この王宮が宝庫・宝蔵であることは Darius Persepolis 碑文 c によって明らかで、この点は拙稿 *Gathica VI*<sup>2)</sup> に詳しく取り扱う。この建物は大王が暫時居住することはできても、常時起臥するところではなかった。そのような建物に、ダーラヤワウシュ大王の子クシャヤールシャーはつぎのような碑文を追刻している：

アウラマズダーの御意により、このハディシュを、余の父、王ダーラヤワウシュが造営した。

この碑文は Xerxes Persepolis 碑文 c とよばれるもので、訳載したのはその一部、碑文の位置は柱廊入口の両側壁柱 (anta) や南石階のファサード。父王が「宝蔵」(ardastāna-) と銘打っているこのタチャラに、子が「住居」の意味をもつ *hadiš-* と追刻するのは納得しにくい。また、すでにタチャラとして、中央宮に対し「副次的な建物」であることを Darius Persepolis 碑文 a (p. 82) は宣言しているので、この点からも「住居」の意味をもつ *hadiš-* の語を追刻するのも、いささか蛇足の感がある。つぎは、ダーラヤワウシュ大王のスーサ王宮碑文 f であるが、p. 80f. に訳載したところからうかがうと、*hadiš-* は、なにか多くの貴重な素材で出来あがったものというような意味合いを感じさせる。「七宝合成<sup>ごうじよう</sup>の宮殿」とでもいった感じである。こういう意味だと、ペルセポリスのダーラヤワウシュのタチャラ＝宝蔵宮にも違和感をかもさないで、うまくおさまるように思われる。要するに「りっぱな王宮」という意味である。

では、そういう意味に読みとるには、問題の語をどのように解読すればよいか、ということになるが、筆者はそれを *ha<sup>n</sup>dīš-* すわなち *handīš-* とよんで「合成宮」(「多くの素材の集積、合成」という意味から) と解することを提唱したい。*n* を表記しないのは古代ペルシア語碑文のくせで、*ba<sup>n</sup>daka-* = *bandaka-* 「しもべ」、*Ga<sup>n</sup>dāra-* 「ガンダーラ」その他、例は多い。*handīš-* の語根は *dā-* (Ind. *dhā-*) “to put” や *dā-* “to bind” が考えられ、それに *ham-* → *han-* を前接した *\*ham-dā-* “to put together” や *\*ham-dā-* “to bind together, to tie” には、それぞれ同義の Ind. *saṁ-dhā-(a-)* および *saṁ-dā-* がある。末辞 *-iš* には、そのまま IE. *-as, -is* にさかのぼりうるものや、*-i* に終わる幹を *s* で拡張したとみられるもの、などがある。もっとも、*-i* に終わる幹といっても、*-ā* に終わる語根の場合は、その *ā* が *ā>ə>i* となる場合があるから、*-i* 幹の *i* といっても、*-ā* が全面的に脱落してそのあとに加えられた *-i* であるか、それとも *ā>ə>i* となった *-i* であるか、決定しにくい面もある。が、それはそれとして、*-ā* に

終わる語根から派生した *-i* 幹としては、さしあたって、Ind. *sam-dh-i-* m. “junction, connection” <*sam-dhā-*; *antar-dh-i-* m. “concealment, covering” <*antar-dhā-* (*a-*) “to place within, to hide”; *prati-ṣṭh-i-* f. “resistance” <*prati-ṣṭhā-* “to stand; to resist” (Av. *paiti-ṣt-i-* f. “Sichdazustellen zu-” [AirWb. 827]; *darəṛā. upa-st-i-* f. “lang dauernder Unterstand” [AirWb. 694]); *ā-d-i-* (*i-*) m. “beginning” <*ā-dā-* “to take; to begin” などが参考となる。*-s-* で拡張した形というのは *śuc-* “to shine” > *śuci-* adj. “shining” > *śuciṣ-* (*śuciṣ-mat-* “having radiance” における) の如きものである。由来はともかくとして、*-iṣ-* 幹はインドにもイランにも、かなり在証される。イラン側を二、三例示すれば *təviṣ-* n. 「暴行」(AirWb. 649) <*tav-* 「能くならず力量がある」(ditto 638); *narəpiṣ-* n. 「崩壊」(AirWb. 1054) <*narəp-* 「(月が)欠ける」(ditto 1053); *snaiṭiṣ-* n. 「切ったり打ったりするための武器」(AirWb. 1627) <*snəθ-* 「打つ」(ditto 1627) など。したがって、*handiṣ-* (<*\*ham-d-i-ṣ-* <*\*ham-d-i-* <*\*ham-dā-*) は中性名詞として「結び合わすこと、集積すること、<sup>ごうじょう</sup>合成すること」を意味するが、これを王宮に関して用いるときは、その工程に重きをおいているわけで、“(Palace of) Aggregation (of many materials)” すわなち「合成宮」あたりを意味することになる。*handiṣ-* はこのような意味をもつ「王宮」であった。*handiṣ-* のアッカド語訳には、「家」、したがって「王宮」、を意味する *bit*, *ekalli*, *dašari* が用いられ、エラム語訳には同じく *uelmannu*<sup>14</sup> が用いられているが、これらは O. P. *handiṣ-* のもつ意味にまでは肉薄していない。

当面の語を筆者のように読み、かつ解釈することによって、問題がすべてなくなる、というわけではない。*handiṣ-* <*\*ham-dā-* (*da-*) (*dā-*: Ind. *dhā-* “to put” and *dā* “to bind”) と解釈しても、かなり違った結果も得られる。ヘロドトス(「歴史」I 98)によると、メディア王デイオケスのアグバタナ(現ハマダーン)城は七壁をめぐるしていた。また、中世ペルシア語書、たとえば「ジャーマースプ伝<sup>3)</sup>」にみえるカング城(Kang-diz)も同様である。直接、王宮群からなる複郭であるという表示はないが、そのように解釈することもできる。そういう点も考えあわせて、*handiṣ-* を an aggregation of royal buildings とみる立場も成り立ちうるかもしれない。E. F. Schmidt<sup>1)</sup> は *hadiṣ-* <*had-* “to sit” という在来の立場に立ちながらも、スーサ王宮の *hadiṣ-* を論じるとき、それを an aggregation of royal buildings または palace compound というふうに解したい意向を示している。しかし、全般的にみて、やはり、単一の王宮をさして *h diṣ-* とよんでいるから、シュミットの解釈は成立しにくいように思われる。つぎに考えら

れることは、ダーラヤワウシュのペルセポリスのタチャラ=宝蔵宮にクシャヤールシャーが *h diš-* と追刻しているところから、*h diš-* を宝庫・宝蔵の意味に解することである。*h diš-* を宝蔵 (*ardastāna-*) のシノニムとみなすのである。この場合でも *handiš-* (<*ham-dā-* [この場合の *dā-* は Ind. *dhā-* のみが可能]) は妥当する。「集積すること」の意味から、「集積の場」というふうに解し、やがて宝蔵の意味となり得る。ダーラヤワウシュのタチャラ=アルダスターナ (宝蔵) 宮を拡大したとも見るのでできるクシャヤールシャーのタチャラ宮には、なるほど、宝蔵としての *handiš-* なる表現はふさわしいようにみえる。しかし、ダーラヤワウシュがスーサでは *handiš-* を用い、ペルセポリスでは *ardastāna-* を用いるということは、そのこと自体が矛盾である。また、クシャヤールシャーが「宝蔵」としての *handiš-* なる語をおのが王宮のみか、すでに *ardastāna-* 「宝蔵」と銘打たれている父王の王宮にまで、屋上屋を架すがごとくに、追刻したとは、考えにくいのである。それから、もうひとつ、違った見方ができる。それは、ダーラヤワウシュのスーサ王宮 *h diš-* が「壮麗なもの」(*fraša-* “*hervorragend*”) にみえるところから、*handiš-* を <\**ham-di-* (Ind. *sam-di-* “to shine together, to bestow by shining”) <Ind. *di-* “to shine (forth); to excel” とみて“(Palace of) Brilliancy”「光華殿」などと解することである。事実、ペルセポリスのダーラヤワウシュのタチャラ=宝蔵宮も、そう言われてもはずかしくない美しさを具えていた。Darius Persepolis 碑文cのアカド語版は、はっきりと「磨いた石」(*aban galāla*) で出来ていることを伝えているし、この王宮が Hall of Mirrors と通称されているのも、うなずける。メーン・ホールの北に隣接する、ふたつの小ホールの床は、赤色のプラスターに往時のおもかげをとどめている。四窓や10個のニッチに、縁取りのように、彫りこまれた碑文も、多分に装飾的である。かれこれあわせ考えると、*handiš-* “(Palace of) Brilliancy” (光華殿) にもふさわしい。そこで、筆者はまことにズルイことを考え出した。*handiš-* “(Palace of) Aggregation (of many materials)” を「七宝合成宮」とみれば、これで十分美しいことになるのではないかと。*handiš-* は、いずれにしても、建物の出来具合、仕上がり——そんなところに重点をおいた表現として、「王宮」を示すものであるから、ペルセポリスのダーラヤワウシュのタチャラ=宝蔵宮に、それが付刻されても、不都合は来たさない。この建物の機能面は「アルダスターナ」(宝蔵宮) で示され、工程構造面は「ハンディシュ」(合成宮) であらわされ、他の建物に対する位置づけは「タチャラ」(陪殿) で示されているということになる。

## 自 画 自 賛

結論としては、スーサの「ダーヤラウシュ大王のタチャラ=ハンディシュ（合成）宮」、ペルセポリスの「同王のタチャラ=アルダスターナ（宝蔵）宮」、同じく「クシャヤールシャーのタチャラ=ハンディシュ（合成）宮」という呼びかたが正しい、ということになる。これまでのように、ペルセポリスのダーヤラウシュの王宮にのみタチャラを用い、クシャヤールシャーのそれにはタチャラは用いず、「クシャヤールシャーのハディシュ（しかし、いまやハンディシュ）」とするのは、かたよった扱いかたである。建物ばかり見ないで賛（？）もにらんでみたら、こんな結論が出てきた。銘文をのこした大王たち（じっさいは書記官たち）にしてみれば、「自画自賛」だから、なにも問題はあまいが、われわれには、そうはいかないのである。碑文を彫りつけたのは、どういう目的からか。読んでもらうためなら、だれに読んでもらうためであったか。こういうことは、この論考とは別の課題であるが、またしても考えさせられるテーマである。

（筆者は京都大学文学部教授）

## 註

- 1) O. P. *si<sup>n</sup>kabru-* は語意不明。Herzfeld は“Zinnoberstein”としているが、W. Brandenstein und M. Mayrhofer: *Handbuch des Altpersischen*, Wiesbaden 1964, Lexikon p. 142. の同語の条下をも参照のこと。アルメニア語 *sngoyr* は同一系統に属す。
- 2) *Orient*, Vol. 6, 東京 1970 に発表の予定。
- 3) *Ayādgār i Jāmāspīg* (G. Messina: *Libro apocalittico persiano Ayātkār i Žāmāspik*, Roma 1939), chapt. VII, §§ 2-3.
- 4) *Persepolis I*, Chicago 1953, p. 30.